

沃衛生見習士官が当っていた。
三月二十七日頃、空襲が激しくなつたので、東風平国民学校から
附近の壕に移った。

三月三十一日は学校の卒業式の日であつたので、当日は九十業
式列席のため、一時帰校とすとのことであつたが、空襲が続いた
ので、帰校をさせず、今日晩に豊見城々跡に在る山ヲサワ
部隊に正式（看護婦）として入隊した。

入隊式は各班長（下士官）の指揮で整列し、部隊長（小池
勇少佐）から、今日より皆さんは一切兵士全杯の取扱とやら
から全員覚悟を新にして、皇国のために活動するよう
この訓示を受けた後、軍人勅諭、戦陣訓を復唱して、式を
了えた。
入隊と同時に国防色の看護婦衣、上衣、袴下のほか一般兵全
様日用品、携帶食糧（缶詰、鯉節、乾麵包）地下足袋の支
給をうけた。その頃は患者も少かつたので、病室勤務以
外に受付、整理、薬剤の事務面に五、六名廻された。
病室勤務者は交互に雑役や食糧運搬もこなして回した。

四月四日頃、家族との連絡、家庭整理があるものは、帰宅面会を
許すとのことだったので、理由書を書いて三〇名が帰宅面会が
許された。

三〇名は空襲が激しく、既に米軍が上陸していたので、夫々最寄
の部隊に入隊した模様で、帰隊したのはいなかった。（他の部隊に
いた県立一高女生二名が豊見城村にいる家族との面会に未
その部隊に帰れないうで自分達の部隊に入った。）

四月中旬頃、カ員傷兵が運ばれて来たので、事務の方にいた
学徒も、病室勤務に廻され、患者の治療看護に当つた。
五月、首里の總攻襲が失敗してあとからは、患者が急増して
壕内の通路も通れず、程患者を収容し、収容出来なものは他
病院に廻した。

五月中旬頃、那覇一橋方面から進攻した米軍が部隊の近く
に迫つたため、軽傷患者にだけ、部隊の移動を告げ、これ等の
患者を治療后、単独、或いは付添で、午前一時頃、戸文仁に
南下すべく、壕を出た。
壕内には約一〇〇名位の、重傷患者がいたが、これ等は部隊の

移動を察知し、自ら、殺してくれと頼む者や、非常に苦しんで
いる者は注射で以て処置し、残りの者には食糧品に便器
も添えて、枕下に置いて其儘壕を出た。中には腹這いで壕
外に出て死亡したのがいた。

豊見城から艦砲の中を波平、座波、高嶺、真壁を通り、久文仁
村系洲の天然洞窟に到着した（夜明け方）。

系洲到着后、学徒看護婦は患者の収容、看護に当る
傍ら、高嶺村国吉方面から、食糧運搬や、真壁部落一帯の
空屋の戸板を外し運搬した（壕内の病床、担架等に利用のため）

六月十日頃（高嶺村国吉部落に米軍が来た頃）から、部隊の
衛生兵は下士官の引率で斬込に出て行ったが、大半は帰って来
なかった。

六月中旬頃から米軍は部隊のいる壕上の土地を占領して幕舎
も立て、いたが、時折、整山岩礮らしい音が聞えてきて、壕破壊
を目的としているように感じられた。

六月二十日頃、壕入口に火焔が放射されたり、催涙瓦斯が流しこ
まれ、患者多数（約一百名近く）が死亡した。

生存者は壕奥に移ったが翌日から毎朝八時頃に、米軍は午
前に投降するまうに勧告していた。若し壕外に出ないとガソリ
ンを流し込んで燃やしてしまうと、練り返していたので、六月二十六日

昼頃に、部隊長小池軍医少佐は学徒隊に対し、
現在迄奮闘して、戴いて御苦勞であった。皆さんは壕を出て
後方に退り、何処かに健在である部隊もあることだから、こちら
の状況を知らせて貰いたい。壕から出てからは、団体で行動し
ないよう、二、三名位で行動して、いたゞきたい。米軍に捕
まった場合は従軍看護婦であったと云わず、一般女学生
であるというように、町寧に解散の言葉を述べられたが、
学徒は全員、最後迄部隊と行動させてくれるように頼ん
だが、部隊長は

「兵隊は郷里から歓呼の声で送られて来ているので、戦死は覚
悟であるが、貴女方は学生で教育をうけに来ているし、自分の
郷土でもあるから、此れからの仕事が残っている。死ぬことだけが
国に対する御奉公ではない。私には貴女方位の子供がいる

兵隊は郷里から歓呼の声で送られて来ているので、戦死は覚
悟であるが、貴女方は学生で教育をうけに来ているし、自分の
郷土でもあるから、此れからの仕事が残っている。死ぬことだけが
国に対する御奉公ではない。私には貴女方位の子供がいる

内地の学生に較べたり、貴女方は可愛想である。貴女方を散
 華させるのが忍びない。貴女方はどうぞ生き延びて、内地
 の人たちに沖繩戦のことを伝えて貰いたいと涙乍らに訓され
 たので学徒は身の廻りを整理し元の学生服に着替
 えて今日晩に一人々々部隊長と握手を交し、二三名宛組
 をつくり十四五分おきに壕から出て国頭突破を企てた。
 当時部隊長は自決の準備をすゝめて、既に自分の遺骸
 を収容する穴も掘らせてあったが、当番の軍曹と打合
 せて、学徒が出てから自決する意圖のようであつたが、
 一部学徒には忘れ物をとり壕に戻つた時、部隊長は
 切腹して果て、壕内の兵隊も騒ぎ出したので、忘れ物もとら
 ずに壕外に出たのと、壕内に潜んで、部隊長の自決後、
 壕外に出たのがいる。
 壕を出た翌日の朝、壕(洞窟)は米軍の攻塵をうけて
 いるもの、如く黒煙が高く上つて、いるのが望見された。
 米軍に捕えられた学徒は、何れも一般女学生であること
 尋問に答えたが米軍は学生服の胸にある四年生のマ

ークを見て、從軍看護婦であることを既に承知し、その答
 を反駁された。

資料提供者 金城 幸子

津波古ツル
 (改姓小波津)

